

---

# **あずま第一高等学校便利屋部**

そーだ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あずま第一高等学校便利屋部

### 【NNコード】

N2945Y

### 【作者名】

そーだ

### 【あらすじ】

個性派揃いのあず高便利屋部員たちが大暴れ！

果たして、便利屋部員たちは生徒や教師からの依頼を全て解決することが出来るのか？！

作者、そーだ初・個性的青春ハチャメチャ学園コメディー！

## プロローグ 説明に換えて（前書き）

この物語に出てくる人物、建物、場所等は全て実在しません。  
作者初めての作品です。どうか、温かい目で見て下さると幸いです。

## プロローグ 説明に換えて

### あずま第一高等学校

通称『あず高』。あづま市の最北に位地している公立校。

男子は学ラン、女子はセーラー服を着て、学校生活を満喫している。

全校生徒600人、1学年5クラスの40人編成である。

あず高には、創立当初から存在する「便利屋部」という特殊な部活動がある。

生徒や教師からの依頼を部員達の気分によって承るのが主な活動である。

部長、副部長、3年生部員代表1名の3名が誘った生徒しか入部できない仕組みになっている。

そのため、部員は各年度によつて異なるが、4～6名が相場である。依頼者は校舎3階にある便利屋部部室を直接訪れ、依頼をしなければならない。

顧問がない特殊な部活動のため、全責任を生徒が背負つて活動しなければならない。

この物語は、あず高便利屋部の活躍を描いた青春物語である。

## 日常 登場人物紹介に換えて

あずま第一高等学校、校舎3階のとある部室にて。

「ねえ、眠たい・・・。」

「それにしても、暇ですね。」

「依頼は?」

「まだ無い。」

「ああ、今日も暇潰しか。」

あず高一有名な部活動、「便利屋部」。  
生徒や教師からの依頼を活動としているが、現状は部員たちがいかに暇を潰すかを考えるのが活動となっている。

今年の部員数は、3年生が3人、2年生が2人の合計5人。  
そして、5人共周りから「個性的」と言われているのが特徴だ。

まずは、2年A組の大間オオマトワ  
トワ 兔杷。通称マト。

ショートカット、地毛の茶髪、身長145cmで華奢。肌の色素が  
薄い女の子。  
学年トップ、模試では全国トップの成績を誇るが、運動能力は皆無。  
「マト」の由来は、「smart」からきている。人の心の動きに  
敏感である。

次は、同じく2年A組の梧桐コトウ 沙織。通称イオ。

ロングヘア、地毛の薄い灰色の髪、緑色のぱっちりとした目が特徴的な女の子。

父はイタリア人、母は日本人というハーフの帰国子女。

マトの幼馴染。英文学は原文で読むのが好き。成績は学年3位。「イオ」の由来は、天文学が苦手な事からきており、マトにつけられた。

誰にでも優しく、人懐こさがあり、人望に厚い。

次は、3年C組の草摩 咲人。通称サクト。

短髪の黒髪が映える身長の高い便利屋部部長。自他共に認める便利屋部の策士である。

人脈が幅広く、相当な権力者にも顔が利く。

全校生徒の顔と名前を覚えており、成績などの個人データを閲覧できる特別な生徒。

高校側から特別視されているが、その理由は本人でさえ不明である。策士と言われているが、成績は下の上。運動神経は他人から羨ましがられるほど良い。

次は、3年A組の鐘持 好汰。通称コウタ。

短髪の黒髪が映える身長は人並みの便利屋部副部長兼生徒会執行部副会長。校内一有名な「貸し借りの鬼」。

今年の便利屋部から、依頼をした生徒や教師は便利屋部へお礼、もしくは情報提供をしなければならなくなつたのはコウタが原因である。

彼の中で依頼することが「貸し」、依頼を解決にあたつて情報提供をしたり、解決後にお礼をしたりすることが「返却」となつている。

笑顔がチャームポイントだが、貸し借りのことになると冷酷な殺人鬼のような顔をする。

非常に金に執着しており、部員全員に呆れられるほどのケチ。

成績は中の下、運動神経は人並みである。

最後は、3年C組の森本 馨。通称カオル。

6対4で分けた短髪の黒髪、3年のサクト、コウタよりも小柄で華奢。つぶらな瞳が特徴的な男の子。

他人に上目遣いをすることで他人の本性を見破ることができる。猫に懐かれやすく、自身も三毛猫を飼っている。サクト、コウタとは小学校の時からの幼馴染。成績は中の下、運動神経は人並みである。

「マト、何見ているの？」

「・・・サッカー部と野球部と陸上部。」

「ああ、グラウンドか。」

「うん。窓を閉めてても、声が聞こえてくるよ。」

「そつか。」

マトとイオがクスクス笑いながら、話を続ける。

「依頼、全然来ないけど、これで何週間経ったの？」コウタ。

「5週間突破！オメデトー！」

「どこがめでたいの、それ。」

「まあ、コウタが鬼のような顔をしなくていいだけ平和か。」

「まあ、な・・・。」

「オイ、2人共、それどうこうことだよ。」

「いやあ、それは・・・。」

「えつとー。」

サクトとカオルがコウタから逃げるよう追いかけっこを始める。

5週間も依頼が来ず、暇を持て余していた便利屋部に依頼が来るのは2日後のこと・・・。

?

5月の暖かな日、便利屋部の部室にノック音が響いた。

その途端、部員たちの目に光が差した。

部長であるサクトが急いで部室のドアを開けると、そこには怯えた顔でサクトを見る一人の男子生徒がいた。

「えっと・・・僕、今日ここへ依頼に・・・来たんですけど、そのいいですか?」

「大歓迎だ!」

男子生徒は、サクトの高いテンションについていけないまま、「はあ」と頼りない返事をした。

「君は、2年E組の葉山ハヤマ ウタ詩くんで合っているよね?」

「どうして、僕の名前を?」

「一応、全校生徒の名前は頭に入っているので。」

サクトが得意げにクスッと笑うと、葉山はまた頼りない返事をした。

「ねえ・・・依頼は?」

マトが尋ねると、葉山は俯きながらこう言った。

「・・・好きな子への告白を成功させたいんです。」

「分かった。それなら、葉山くんは俺達便利屋部に何をしてくれる？」「

「ウタの鬼のような田が葉山に向けられ、葉山は余計に怯えながら口を開いた。

「えっと、そしたら僕は・・・出来るだけ、情報を提供します。」

「情報の質は問うが、それでも構わないのか？」

「・・・か、構いません！」

葉山は「ウタの問い合わせに慌てて答えた。

「ウタは、しばらく部室の天井を見つめて考えた後、頷いた。それを合図にサクトが葉山にこいつ切り出した。

「それでは、この依頼、便利屋部が責任を持つてお引き受けいたします。」

葉山に一礼をしてから、イオが葉山に部室を出るようにな内した。  
「もし、情報が必要になつたらこちから呼び出しますから、部室まで来てくださいね。」

「わ、分かりました。よろしく・・・お願ひします。」

葉山は、イオに一礼をしてから部室を出て行った。

「さてと、大変なことになつたな。コイツ、相当な厄介者だ。」

サクトが予め電源を入れていたパソコンのディスプレイを見て、そう呟いた。

ディスプレイには、もつ既に葉山に関するデータが表示されていた。

?

「厄介者かあ。何となく、顔を見た時にそんな感じはしてたけど…。  
・。」

「また、上田遣いで人を見たのか。」

カオルの発言にサクトが少しだけ呆れる。

部長として幼馴染としても、カオルの能力を心配しているサクトは、その能力を依頼の中で使用しつつもどこかいつも不安げであった。

「少しだけだから、別に支障はない。」

「ふうーん。じゃ、全員に葉山のデータを紹介しておく。まず、成績。コレは問題なし。マトよりは下だけど、2年としてはいい方にいふと思つ。イオの下辺りかな。」

「なるほど。でも、私、2年生であんな人初めて見ました。」

「やつぱりな。イオがそういうのも分かる気がする。」

「どうこうことですか?」

「地味で人と接することが苦手。短すぎる髪と白い枠の眼鏡のくせに目立たない体質。友達は片手で数えられるほどしかいない。」

「そ、そうだったんですね。」

「まず、依頼を解決するには葉山自身を変えなきゃ、無理だな。」

サクトの発言に「カウタが無言で頷いた。

「カオル、“アイツ”を呼んで来い。」

「了解。」

カオルは、サクトの指示通りに部室を出て、“アイツ”を探しに行つた。

30分後、部室のドアが開いた。

「久し振りだな、学校一のイケメン君。」

?

「一度とその面、見たくなかったけどなー。」

葉山と同じ2年E組の井上奏。  
イヘウカヒ  
ソウ

彼は、「学校一のイケメン」と評されている。1年の頃、調子に乗った結果、校内に10人以上の彼女をつくってしまった、「本命以外の彼女と縁を切る」という依頼を便利屋部にしたことがある。

「本命さんは、上手くいってるのか?」

「まあな。」

井上は、先輩に敬語を遣つことが嫌いで便利屋部員にもタメ口で喋るのが常だ。

サクトは、井上の事を気に入っているため、井上がどのよつた態度を取ろうとお構いなしだ。

「早速だが、オマエからの借りを返してもいい時が来た。」

「用件は?」

「同じクラスの葉山を改造しろ。」

「えつ? それ、どうこう」と?.

「イケメンに進化せろー。」

「ハア？」

井上の叫びが部室内に響いた。

「オマエのセンスを最大限に生かして、葉山をイケメンにさせたら、借りを返したことになる。まあ、それにはコウタの許可が必要だけどな。」

「・・・分かつたよ、やればいいんだろ?」

「但し、葉山を改造する金は部費としてこいつから出す。いいな？ありつたけの金を使ってでも、葉山を改造させや。」

「使い放題つてことだな？」

井上の余裕そうな顔を見て、コウタが鬼の形相でこう言った。

「領収書は全部出してもらひ。」

「わ、分かつてるよ、そんなこと！誰が黙つて、無駄遣いするか・・・。」

少し焦った様子で井上は返事をする。

「期限は明後日までだ。分かつたな？」

「一々、うるせえな！分かつてるよ。ハア・・・、やっぱり変わつてないんだな、1年前と。」

「人はそんな簡単に変わるものじゃないからな。」

やつぱりと、サクトは一ツ口笑つた。

?

翌々日の放課後、井上が葉山を連れて、便利屋部を訪れた。

「あ、あのっ・・・僕、こんなの、初めてなんですけど・・・。」

葉山は相変わらず、自信のない表情をして俯いている。

葉山の髪は、長さを変えずにワックスで外ハネがついていた。そして、眼鏡ではなく、コンタクトレンズに変わっていた。

「コレで20000円以下だからな！感謝しろよ、便利屋部。」

井上は、自慢げに領収書を「ウタヘ差し出した。

「・・・分かった。それじゃあ、後は便利屋部の出番だな。」

井上は、「ウタの言葉を聞いてニヤツと笑い、部室を後にした。イオが「ありがとうございました」と笑顔で言ひ姿すら田に入つていなかつた。

葉山は、井上が部室を出てから、ホッとしたような顔をした。

「どうしたんですか？ヤケに安心したような顔をしていますけど・・・。」

サクトの問いかけに葉山は体をピクッと反応させた。

「あ、あの人っ、僕・・・すつ・・・苦手で、怖いんです。」

「同じクラスなのに、ですか？」

「同じクラスでも……触らぬ神に祟りなし、みたいなものです。

「

「へえー、そうですか。それなら、まずは理由を考えていただいて構いませんね。」

「えつ?」

葉山は、サクタの言葉を聞いてよしよしと顔を上げた。

「ねえ、気付かないの?そんな性格じゃ、好きな子だって振り向いてくれないってことに。私みたいな変わり者だって、それくらい分かるよ?」

マトが葉山に向かって微笑を浮かべる。

「マトの言ったとおりです。好きな子に対して、その性格を変えないなら、ここで終わりです。葉山くんは、今までの自分が好きだったんですか?」

「ほ、本当の……僕?」

「人と接することが苦手、自分に自信がない、陥りがちでダサイ。そう言わても、反抗できないのが事実ですかね?そんな自分で葉山くんは、本当に満足しているんですか?」

「僕は……」「

葉山は、俯こいつと首を動かしてから口を動かした。

「変わりたい、です。」

「その言葉を待っていました。」

サクトが一ツコロと葉山に向かつて笑った。

葉山は、すぐに顔を上げた。

「では、葉山くんの想い人に関する情報をお聞きする。」

コウタの冷たい声が部室に響いた。

「井上 麻耶つていう人で・・・井上くんの・・・妹です。」

「サクト、データは?」

「もう表示済み。彼女は、ウチの学校の1年生。幸い、彼氏無し。  
恋愛偏差値は葉山くんと同等だと思つ。」

コウタは、サクトの情報を聞いてから、葉山と話を続けた。

「彼女を好きになつたきっかけは?」

「井上さんは、僕と同じ美術部なんです。凄く綺麗な絵を描く子だ  
と思って、絵から作者本人に興味が湧きました。それから、少しだ  
け会話をするようになりました。今は・・・まだ進展していません。」

「

「ふうーん。」

「井上さんの好きなタイプは、大人しくて落ち着いている美術部の人、らしいよ。」

サクトが部室全体に聞こえるように報告した。

「美術部つていうところは合格だね。」

カオルがそれを聞いて、安心したように笑った。

「葉山くんの場合は、大人しすぎると思います。後、もう少し落ち着いて話せたら喋り方は違和感がなくなると思いますよ。」

イオが葉山に向かって助言をする。  
しかし、葉山は俯いたままだった。

「ねえ、どうしたの？ 美術部つていうところは、合格なんだよ？」

マトが机に座りながら、首を傾げた。

「・・・僕、来週で学校辞めるんです。」

「えっ？」

部員たちの顔が曇った。

?

「……家の事情で働くことになりました。もう、就職先は決まっています。だから……最後に井上さんへ想いを伝えたいと思って、依頼をしたんです。……本当にゴメンなさい。」

葉山は、頭を下げた。

「それなら、余計に頑張るしかないね。」

カオルが葉山に駆け寄った。

「それ……どういふことですか？」

「葉山くんの最高の思い出として、便利屋部が告白の成功をプレゼントする…それでいいよね、皆?」

カオルの問いかけに部員たちが笑顔で了承した。

「今日はここまでにします。明日から、毎日ここに来て下さい。色々と情報交換をします。」

「わ、分かりました。」

サクトの言葉に葉山は慌てながら一礼し、部室を出た。

その後、便利屋部は作戦会議を開いた。

「ウタがホワイトボードの前に立ち、ペンで作戦内容を書いていく。

サクトは、机に頬杖をつきながら作戦をべラべらと話す。カオルは、それを適当な相づちで流している。

イオは、それを真面目に頷きながら聞いている。

マトは「うと、机に座りながら足をブラブラ揺らし、窓の外を見ながら歌をうたっている。

これが便利屋部の部活動の実態である。

ちなみにマトは、この後イオから分かりやすく作戦を説明されるので、共通理解に問題はない。

「作戦実行は、葉山くんが学校を辞める日の前日。」

「了解！」

コウタ、イオ、カオルの声が揃つた。

その後でマトが「りょーかい」と歌に乗せて呟いた。

それから、便利屋部と葉山は密に話し合いを進め、遂に作戦実行日となつた。

場所は屋上。特別に便利屋部の名を借りて、学校側から開放してもらえることになった。

告白する時の言葉は、マトとイオからの助言を得て、決めてあつた。喋り方はサクト、コウタ、カオルの力を借りて、どうにか克服をした。

性格は、葉山自身が部員たちから助言を求め、麻耶のために自力で改善した。

葉山が設定した時間に、ちょうど麻耶はやつて來た。

「葉山先輩、どうしたんですか？こんな所で。」

「『ゴメンね、急に呼び出して。話があつて。』

「話ですか？」

葉山は、麻耶に明日で学校を辞めることとその理由を詳しく述べた。麻耶は、戸惑いながらも必死でその事実を受け止めようとしていた。

「私、先輩の描く絵、大好きだったんです。でも、もう、その絵が見られなくなるなんて・・・嫌です。」

麻耶は、ゆっくりと涙を流した。

「僕も井上さんの描く絵が大好きだった。それに・・・井上さん自身も。」

「えつ・・・？」

「井上さんの描く絵が好きになつてから、井上さんのことも好きになつた。今まで言えなくて・・・『ゴメン。』

「先輩・・・私。」

翌日、便利屋部の部室に置手紙があった。

「えつと、『ありがとうございます』ました。彼女と付き合つことになりました。葉山詩。。。無事に依頼解決だ。」

「やったー！」

サクトは、ホッとしたように笑顔を浮かべる。  
コウタは、お礼を色々と思案している。

カオルは、一安心して椅子に腰を下ろす。

イオは、マトとハイタッチをする。

マトは、それに応え、イオと笑顔を浮かべる。

貸し借りについては鬼のようだが、依頼者の幸福のためなら何でもするのが便利屋部である。

5週間振りの依頼が解決したことで、便利屋部の株が上がり、それ以降しばらくは依頼者が続出した。

しかし、そのほとんどがつまらない依頼だったため、部員たちは「依頼却下」の連続。

また、便利屋部の株が下がり、部室を訪れる人は少なくなった。

日常が始まった。

「ねえ、イオ、喫茶店行こうよ。」

「喫茶店？ いいけど、マトが喫茶店なんて珍しいね。」

「ちょっと会いたい人がいるから。」

「会いたい人？」

ある日の帰宅途中、マトとイオはある喫茶店へ入った。  
適当な席に座り、注文を終える。

数十分してから、注文していたものが運ばれてきた。

「お待たせしましたー、って、アレ?便利屋部の。」

そこへいたのは、葉山だった。

「葉山くん?...」で働いていたんですね。」

「サクトから就職先を聞いたから、来た。イオは、何も知らなかつたから驚いている。」

マトは、イオの様子を見ながらクスクス笑っている。イオは、それを見て、マトに向かって怒ったように頬を膨らませる。

「相変わらず、ですね。それでは、ごゆっくり。」

葉山は、ハキハキした話し方でそう言つた後、別のところへ行つてしまつた。

「葉山くん、元気そうだったね。」

「うん。」

2人は、互いに笑い合つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2945y/>

---

あずま第一高等学校便利屋部

2011年11月17日19時52分発行